

恩納村沿岸のサンゴ群集概要（変遷）

沖縄県サンゴ礁保全再生地域モデル事業（2020年9月）

恩納村沿岸のサンゴ群集に関し、これまでに沖縄県事業（サンゴ礁資源情報整備事業 2009-11、オニヒトデ総合対策事業 2013-17、オニヒトデ対策普及促進事業 2018-19）の一環として、残波岬～部瀬名岬間を対象としてマンタ法により調査されたサンゴ礁斜面のサンゴ群集被度の結果を以下のとおり整理した。

最新の2019年調査結果によれば、恩納村のサンゴ礁斜面は、全体のおよそ半分が造礁サンゴ類被度10%未満、3割は10-25%、残る2割が25%以上であった。被度が十分に高いとされる被度50%以上は村内礁斜面全体の5%未満であった。これは2009年に、全体の9割以上の範囲が同被度10%未満と低かったことと較べれば、過去10年間で徐々に回復してきたことが明らかである。

このように、1998年の白化現象と2000年前後のオニヒトデ大量発生以降、造礁サンゴ類被度は低く推移していたが、2010年以降は緩やかに回復がみられ、2015年以降は万座周辺など地点によっては被度の大幅な増加がみられるなど、長期的には村内全域で回復傾向にある。

2016年と2017年に発生した夏期の高い海水温と強光による白化現象により、短期的には回復が停滞したとみられるが、被度の大幅な減少は限定的であったことから、今後も引き続き村内全般で回復が期待される。

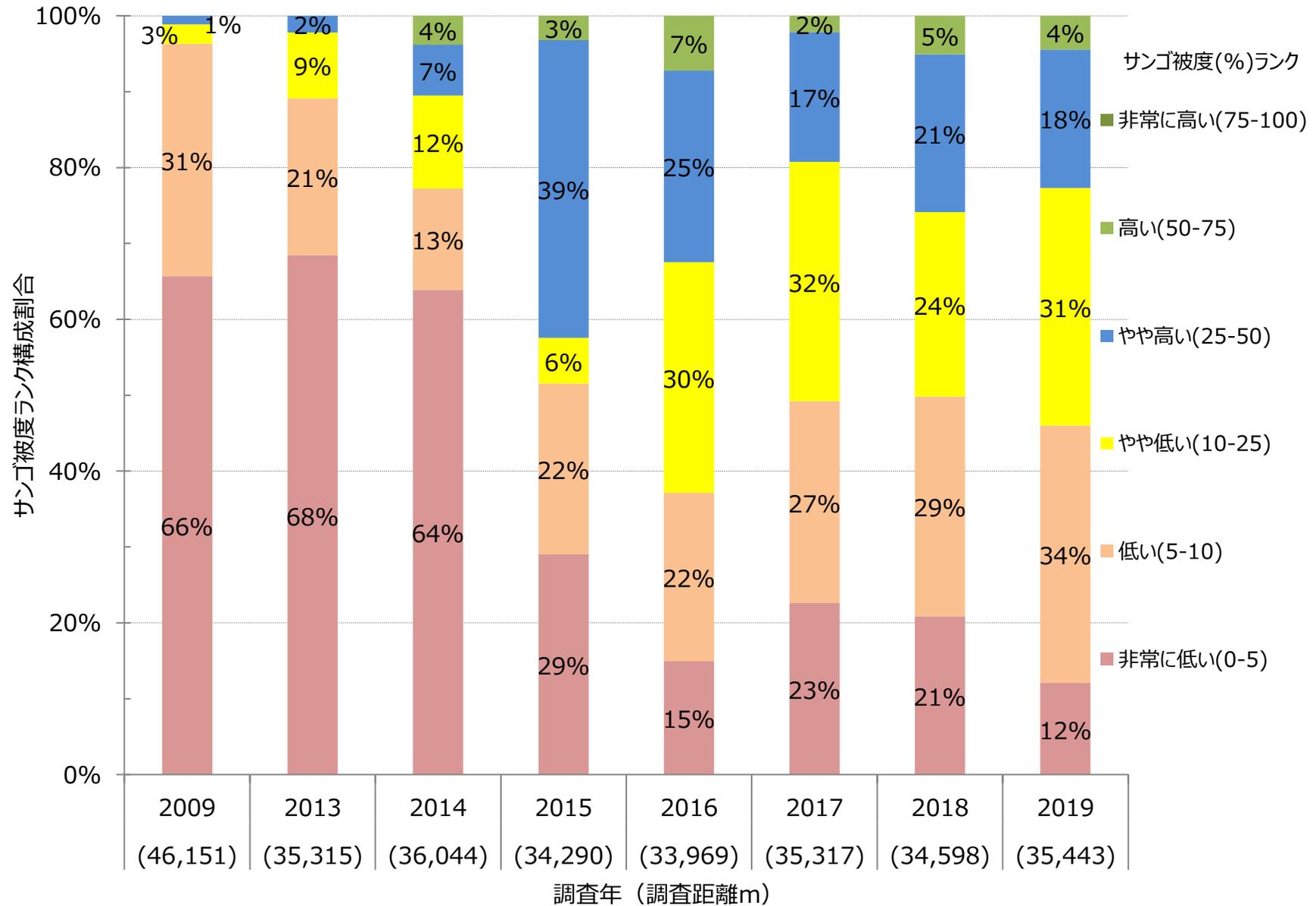


図1. 恩納村礁斜面の調査年毎造礁サンゴ類被度ランク構成割合（沖縄県事業：サンゴ礁資源情報整備事業 2009-11年、オニヒトデ総合対策事業 2013-17年、オニヒトデ対策普及促進事業 2018-19年、におけるマンタ法調査結果より）。



図2. 残波岬～部瀬名岬間礁斜面を対象としたマンタ法によるサンゴ群集調査側線（赤線、距離約35km）の大概の位置（沖縄県事業：サンゴ礁資源情報整備事業2009-11年、オニヒトデ総合対策事業2013-17年、オニヒトデ対策普及促進事業2018-19年、調査方法より）。